

研究テーマ：語彙力を向上させるにはどのように指導すればよいか

所属 高知県立安芸高等学校

氏名 高橋 まどか

RG SH4

1. 研究の背景

アクションリサーチの対象とした文理科 2 年生（男子 9 名、女子 14 名）は、ほぼ全員が大学進学を希望しており、落ち着いた態度で授業に取り組んでいる。過半数が英語に対して苦手意識を持っている。昨年度の模試の結果から、長文読解と表現力の得点率が全国平均を下回っていることがわかった。そこで、語彙力を高めることができれば、英語に対する苦手意識を取り除くことができ、長文読解力等が向上するのではないかと考え、リサーチクエスチョンを設定した。

2. リサーチクエスチョン

語彙力を向上させ意欲的にリーディングに取り組ませるためには、どのように指導すればよいか。

3. 予備調査

(1) 授業観察

- ・クラスの雰囲気は明るく、大きな声で音読できる。
- ・ペアワークに意欲的に取り組むことができる。
- ・文法に苦手意識を持っている。

(2) アンケート、授業評価

アンケートの結果から、48%の生徒が英語に対して苦手意識を持っていることがわかった。その生徒からは「単語がわからない」「日本語と文型が違う」という理由が上がった。

(3) 英語力を示すデータ

昨年度使用した単語帳から、ある一定の範囲で単語テストを実施した結果、正答率が 40%だった。

4. 仮説の設定

仮説 1：英語に接する時間を多くすれば、英語に対する苦手意識が薄れる。

仮説 2：小テストの種類を増やせば、語彙力向上に繋がる。

仮説 3：Shadowing や単語ゲームを実施すれば、楽しみながら語彙が定着する。

5. 計画の実践

(1) 英語を学ぶ環境作り

新出単語の意味を英語にしたワークシートの活用や 100 語程度の速読、また単語ゲームの実施を通じて生徒自身が英語を使う場面を増やし、なるべく英語に接する時間を多くした。

(2) 小テストの実施

1 学期は、週 2 回小テストの日を設け、授業の始めに単語・熟語と構文の 2 種類の小テストを 1 回ずつ実施した。2 学期は、毎授業の始めに単語・熟語の小テストを実施し、構文については引き続き週 1 回実施した。

(3) ペアワークの活用

授業では **Phrase Reading** 指導を徹底し、前の授業の内容についての **Phrase Reading**、**Shadowing**、単語ゲームをペアワークにし、毎授業の導入とした。

6. 実践の結果

- ・ワークシートや速読を通じて英文に慣れつつあり、苦手意識を持ちつつも模試の長文読解や英作問題に意欲的に取り組み始めた。
- ・**Shadowing** や単語ゲームの実施により、授業に変化が生まれた。
- ・単語ゲーム実施の際に、生徒自身が英語を使う場面を増やしたことで、自発的な姿勢が見え始めた。
- ・小テストの実施により、語彙力を高めることができた。
- ・英語の家庭学習が増加傾向にある。

7. 結果の検証

毎回模試が終わる度に、『前回よりは苦手な長文読解もがんばってみた』という声を聞くことができたが、まだまだ結果に結びついていないのが現実である。ペアワーク等の音読練習や単語ゲームを積極的に取り入れた結果、予備調査で実施した単語テストの正答率が **40%** から **55%** に増えるなど、語彙の定着度が増した。また、アンケートによると、単語ゲームで楽しく語彙力を高めることができると好評であった。5月当初、英語学習の必要性を感じているにもかかわらず、家庭学習時間が短く、生徒が主体的に学習に取り組む姿勢があまり見られなかったのだが、小テストの頻度を高めたこともあり、家庭学習時間が毎日1時間以上であるという生徒が **9%** から **23%** に増えているように、英語の家庭学習が増加傾向にある。(第1表参照)。

(第1表) 英語の家庭学習時間の変化

	毎日1時間以上	毎日1時間未満	気が向いた時だけ少し	ほとんどしない
5月	9%	30%	52%	9%
12月	23%	32%	41%	4%

8. 成果と今後の課題

アンケートの結果から、**95%**の生徒が語彙力向上を実感しており、語彙力を高めるためには反復練習が大切だと感じていることがわかった。このことがきっかけとなり、音声・綴りの両方を習得し、今以上に意欲的にリーディングに取り組んでいけるのではないかと期待している。2学期に実施した志望校調査を境に、少しずつ目標に向かい努力し始め、英語学習に対して前向きな姿勢が見え始めた。実際、英検受験者数が大幅に増加し、1月にはクラスの**87%**の生徒が受験する予定である。初めてのアクションリサーチの取組として、生徒の実態の分析から始め、自分の授業を客観的に見直し、生徒の実態に即した授業を行えるよう努めた。その結果、自分自身の授業の問題点や目標が明らかになり、系統だった取組を行うことができた。しかし、計画の立て方が曖昧になった所もあり、まだまだ取組には改善の余地があることは否めない。また、語彙力が向上しなかった生徒への対処等、目標が達成されないまま研修の終わりを迎えてしまったことが今後の課題である。今後も、苦手意識を抱かず英語学習に取り組め、達成感を得ることができる授業を目指し、創意工夫を凝らしながら授業改善に取り組んでいこうと思う。